

日常生活支援住居施設「かなで」 設立と現況について

特定非営利活動法人岡山きずな

かなで管理者 岸武久美子

かなで生活支援員 新名雅樹

かなでの概要



• 場所:岡山県岡山市北区

• 定員:20名

<設備>

• 鉄筋コンクリート造3階建て

• 1985年築、2014年大規模改修実施

• 元学生寮を地元不動産会社よりサブリース

• 居室(1階4室、2階8室、3階8室:各居室面積11.46㎡)

• 共同設備(浴室2室、シャワールーム4室、トイレ9基、洗面所、厨房、食堂、談話室、洗濯機2基)

• 事務室(相談室、事務室、宿直室)

• 屋内素材は難燃素材。防災設備については岡山西消防署届出済み

• 全室個室、各室定員1名(カギ、エアコン、TV、ベッド、小型冷蔵庫付)

• 職員:施設管理者(生活支援員兼務)1名、生活支援員1名、宿直員(人員配置基準10:1、食事提供なし、宿直あり)

各設備等



居室



食堂



浴室



浴室内



シャワールーム



洗面所・トイレ



談話室・喫煙所

かなで開設までの経緯

- 従来から岡山市より受託運営している一時生活支援事業（生活困窮者自立支援法上）の退去者の住まい確保や、生活支援の継続の必要性が法人内の課題として挙がっていた。
- 2020年夏にNPO抱樸よりクラウドファンディングによる日常生活自立支援住居開設支援のお話をいただく
- 法人として初めて無料低額宿泊所の開設に向け準備を開始
- 計画当時、岡山市（人口70万人の政令指定都市）には無料低額宿泊所は全く無かった（いまも当法人のみ）
- 実際は法人として、どこから準備すれば・・・といった状況だった

- 以前、アパート物件として地元不動産会社より紹介を受けていた元学生寮を、ひとまず無料低額宿泊所として開設する方向で決定
- 本物件の選定条件について
 - スーパーやコンビニ、薬局、病院、福祉事務所等が徒歩圏内にある
 - 古くからの文教地区として住みやすい印象
 - サブリースが可能
 - 改修工事が比較的しやすく、費用も予算内の目算

地元との交渉が難航

- 2020年11月はじめ、建物のある町内会役員に開所に向けた説明を実施（条例に基づく「地域との結びつきを重視した運営」）
- 町内会長はじめ、町内会役員は無料低額宿泊所開設に協力的であり、町内住民への説明会を開くことを希望
- 11月半ばに町内会公会堂にて説明会を実施
- 当法人がホームレス支援団体であることや、ホームレス者等への差別発言、子どもへの安全対策などを理由に開設反対派の声は想定以上に大きく、説明会は紛糾した
 - 特に学区内の「小中学生への安全配慮」への対応を求める意見が少なくなかった

- その後、町内会長の尽力により、町内会役員会にて、開設にあたっては町内会が賛否をする立場はないこと（無料低額宿泊所は届出制であることを理由として）を町内会として決定
- 地元町内会の一定の理解や、学区内の小中学校への挨拶回りなどを経て、同時にクラファン応援資金にて内装改修や物品購入などを行う
- 一方で、ごく少数の反対派より差別的な苦情や、クレームが続く
- 学生寮だった当時、外国人留学生等の入居で近隣トラブルもあった

- 2020年度内の開所を目指していたものの、なかなか進まず
- 地元町内会のすすめもあり、施設の隣接町内会へのあいさつ回りを実施
- 多くの近隣町内会は賛同的な様子であった

小学校区での設立反対問題

- あいさつ回りのなか、反対派から設立への猛反対が再燃
- ごく少数の反対派より差別的な苦情や、クレームが出続ける
 - 市役所へのクレーム
 - 法人へのクレーム電話
 - 建物のある小学校区全体での説明会の要求など
- しかし、当法人役員と連合町内会会長等との折衝などが繰り返され、結果、連合町内会として開設に向けての反対意見等は触れられることもなくなる
- どうにか2021年9月開所の運びとなる

入居者の現況

- 現在、男性5名が入居
- 20代～70代後半の年齢層
- 4人が重点的要支援者
 - 要介護高齢者、精神障害者、刑余者、外国籍者
- 紹介はすべて福祉事務所から
- 当施設は現況、人員配置10:1、食事提供なし、宿直あり

運営の苦勞

- 日住としてだけでなく、無低の運営自体が初めてであり、一時生活支援でのノウハウで対応
- 福祉事務所のケースワーカー頼みの入居者確保の状態
 - ケースワーカーと入居者本人の住居確保の切迫感が違うなど
 - ケースワーカーが本人の切迫度（家賃不払いなど）を把握しきれていない
- ケースワーカーに日住は制度上、まだ十分理解されていない
 - 岡山の場合であるが、無低と日住の違い、一時生活支援との違い
 - 周知を図るべく動くも、救護施設ぐらいしかすぐに理解されなかった
- 広報にいろいろ動くが、入居につながる打診はまだ少ない

- 日常生活支援住居施設は岡山県内、また岡山市でも初めての事業である
- 各方面の支援者らもまだ内容が十分把握できにくく、新しい在宅支援の在り方のイメージ像がまだ十分には伝わっていない現状である
- 岡山市内6区の福祉事務所の日住施設の認識にもまだ温度差を感じる
- 岡山県内には無料低額宿泊所が数ヶ所しかない現状と、福祉事務所とトラブルの多い宿泊所（岡山市外）があるため混同されやすい
- 現在は食事提供は行っていないが、今後食事提供などが必要になった場合、現状の職員体制等でどこまでできるか不安が残る

入居者との日々

- 多様な背景をもった入居者
- 個室対応であるが、炊事場、浴室、トイレ（洗面所）は共用であり、一部共同の生活に慣れるまでにやや時間を要する
- 見守り支援付き、に束縛感を感じてはいないか
- 金銭管理が必要と思っても、自分で管理すると言って聞かず、日々のやりくりで苦慮している入居者への対応に悩む
- 毎日の過ごす場所が定まっていないが、まだ地域内での活動先が見つからない

支援計画作成について

- ケースワーカーからの事前情報や本人の面談時の発言が食い違うため、正確な情報を得るには時間が必要
- 現状は一回目のプランなので、十分とはいえず、修正を前提に作成
- 計画内容の一つずつが実は奥深く、広がりがある
- 金銭管理の必要性和実際管理する難しさ
- 地域との連携までには時間が必要

開設して良かった点

- 日住の支援理念は福祉関係者には新鮮であるが、こうした在宅と施設の間のような住居の必要性は理解されてきつつある
- 見守り支援付きであれば、単身生活できる人の存在の再確認
- 一時生活支援事業では難しい長期間での支援が可能となった
- 住まいを起点としているので、多様・多彩な資源とつながることが可能である
- 地域としっかり向き合ったことで、今後、町内会行事などもアプローチしやすくなった

まとめ

- 福祉事務所からは「日住は住まい困窮者の最後の砦」と言われたが、むしろ「再スタートの場」ととらえている
 - 住まいを失う事は重大な課題だが、じっくりやり直すチャンスではないだろうか
 - 対象者を問わない住居のあり方
- 開設準備期に町内住民の反対に合うも、住まいや困窮者支援の学び直しの機会となった
 - 今後、地域との交流を行う上でも必要なことと考えている
- 中長期的視点での運営、経営が求められる
 - 経営的にはまだまだ財政負担が大きい
- 住んで良かったと思ってもらえる支援のあり方
 - 監視、監督ではなく、支え合い、理解し合える環境と支援
 - やり直し、自信を取り戻す暮らし